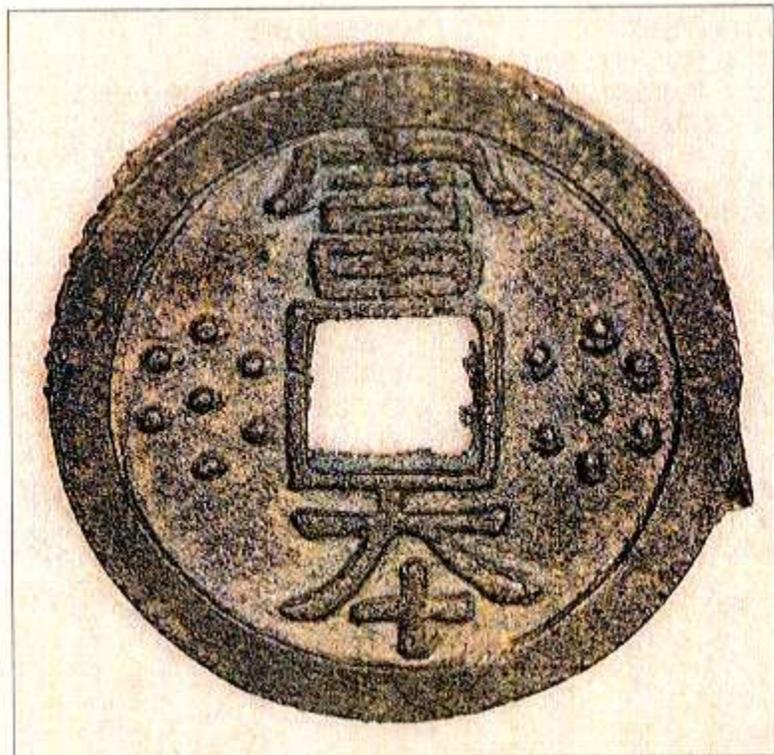


# 最古の通貨は「富本銭」

奈良・飛鳥池 工房跡で大量出土  
七世紀後半 天武天皇期に鑄造



飛鳥時代の金属や装飾品の工房群跡である奈良県明日香村の飛鳥池遺跡から、「富本」の文字のある七世紀後半

の銅銭やその破片三十三点が出土し、発掘にあたった奈良国立文化財研究所は十九日、「わが九に最初の流通貨幣である可能性がきわめて高い」と発表した。これまでは七〇八年発行とされる「和同開珎」が最初の通貨といわれてきた。今回の発見は日本に貨幣史を塗り替えるもので、律令国家体制が整えられつつあった時代の経済や貨幣制度などについての研究が大きく前進しそうだ。

## 「和同開珎説」覆る

富本銭はこれまでに、奈良県の平城京跡と藤原京跡で二点ずつ、大阪市の細工谷遺跡で一点 見つかっている。だが年代が特定できず「奈良時代に建物の地鎮や井戸の清めに使われたまじない銭「江戸時代につくられた縁起物の絵銭」などといわれてきた。

今回の富本銭は、飛鳥池遺跡の七世紀後半の土層から出土し、平均で、直径二・四四釐、重さ四・二五 - 四・五九釐。中心に四角い穴がある。穴の上下に漢字で「富本」とあり、穴の両側に七つの星（七曜）が描かれている。裏は無文だった。ほぼ完全な形のものが六枚あった。鑄張り（鑄型からはみ出てできた板状のもの）が残っているものが多く、鑄型から出された直後とみられ、鑄型の湯道に流し込んだ銅が固まった鑄棹も見つかった。

富本銭の一部は、日本最古の本格的な寺院である飛鳥寺のなかの東南禅院のかわらを焼いた瓦窯跡より古い層にあった。東南禅院は七世紀後半に建てられたことがわかっており、富本銭がこの時期に、この場所で鑄造されたのは確実という。

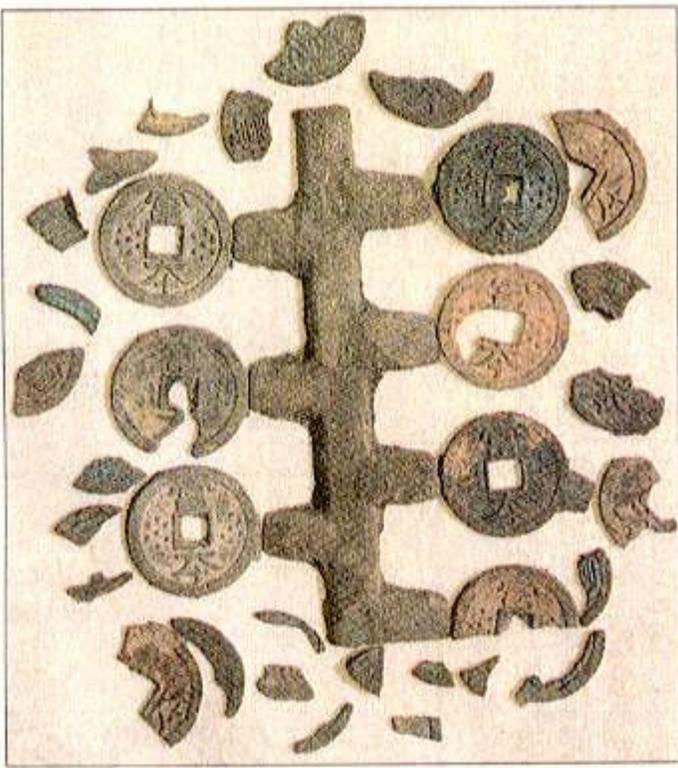
奈文研は、日本書紀の六八三年四月十五日の項に「今より以後、必ず銅銭を用いよ」という記述がある。中国・唐の「開元通宝（六二一年）」と大きさや重さが酷似している。当時の宮殿に隣接した工房群跡から大量に見つかった - などから、天武天皇（在位六七三 - 六八六年）の時代に造られた日本最初の通貨だった可能性がきわめて高いと判断した。

天智天皇（在位六六八 - 六七一年）のころにも、大津市の崇福寺跡などから出土している「無文銀銭」（直径三釐前後、重さ約十釐）があったが、銀の地金としての価値で物々交換的に使われたもので、地金に価値がなくても国家や王権の権威で流通する貨幣ではなかったとされている。

「富本」の文字は、後漢の光武帝に馬援という人物が「民を富ませるもとは貨幣だ」と前漢の「五銖銭」の再興を進言した故事にちなんだとみられるという。

奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部の松村恵司・考古第二調査室長は「藤原京造営などにあたり、都の消費経済を支えるために発行したのだと思う。出土

地点が限られているのは、使われた範囲が都などに限定されていたためではないか」と話している。



㊦飛鳥池遺跡から出土した富本銭の - 枚 ㊧飛鳥池遺跡から発掘された日本最初の通貨・富本銭鑄型の湯道が固まった鑄棹（中央）=いずれも19日、奈良県橿原市の奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部で



和同開珎（わどうかいちん）=写真「わどうかいほう」とも呼ばれる。708年、武蔵国秩父郡（現在の埼玉県秩父市）から鋳が献上されたことを祝い、「和鋳」と改元。その年に中国・唐の開元通宝をモデルに造られた。銅銭と銀金蔓があり、山背（やましろ）国（京都府）や長門国（山口県）などで鑄造された。出土地は近畿とその周辺が多く、約500カ所で数千扱が見つかっている。